

る。第一には、先学の「佐伯史談」によせる確感を損ねたくないし、かといつて、書く以上は読んでもらいたい希望もある。その錯綜（さくそう）（さくそう）（さくそう）の中心は、度々不統一な文体が現れることにあるが、こんなのが一人くらいいいでもないかといふと、むしろ合点（あてま）していい。

こんな考え方自体、私と機関誌ではなくて、すでに私の機関誌である証據（しやうこ）である。

二十周年記念日を迎えて、牛歩のような堅実な重い足取りの中に、物故された先達・諸先生方が私をち後輩に「佐伯史論会」の伝統の基礎を築いてくれた。心から敬意を表し、共にお祝いさせていた。だがこうして更に発展を誓い、祈り、感激と共にこのペンをおく次第である。（おわり）

随想

神話の里を訪ねて

本会会長 高木 嘉吉

四月十五、十六の両日に行つた南九州見学の旅は、多大の成果を収めて無事に終了した。霧島神宮・鶴戸神宮を中心とする神話の里を訪ねることも、一つの目的であつたので、これについて少し書いて見たい。

日本神話は、古事記・日本書紀の神代巻に収められたものである。天地の創造にはじまって、高天原の世界が開け、天孫瓊々杵尊の降臨へと続く。

その降臨の地高千穂については、県北の高千穂町と、小林市の高千穂が本家を争っているが、何れが本家と解決のつく問題ではない。悠久の昔の神話の世帯のことであるから……。

私は霧島の地を訪れたのは今頃が初めてであるが、壮大な霧島神宮に詣で、秀麗な高千穂の峯を仰いで、依回願望、神話の里に遊ぶ喜びを味わつた。瓊々杵尊は霧島神宮に祀られて、人々に尊信されている。ここで天孫降臨について少し考察して見たい。

高天原で天照大神の祝福をうけ、皇位の象徴の三種の神器を持ち、天の九重を押しわけ、高千穂の峯に降つたとあるが、これを現代風に考察したら、どんなこととなるだろうか。

高天原は天上の樂園ではなく、当時としては、最も文化の進んだ地であつたといふ。農耕が行われて水稲が栽培され、養蚕も行われて絹布も生産されていた。天照大神は主権者として、秩序ある社会生活が営まれていた。

この秩序を乱した須佐之男命は、高天原から追放された。高天原は、次第に人口が増えて過密になつた。そこで一種が移住することになった。その団長が瓊々杵尊であり、移住地が高千穂である。古代人は、高嶺な高原台地に居を定めた。依湿地とちがい、水害・虫害・虫害・獣害などが少なく、暮らしやすいからである。高嶺の地として、県北の高千穂も、県南の高千穂も適格である。

以上は私の貧しい考察であるが、これは多少の疑問がある。相手が捉え所のない神話であるから。

しかし神話の里の人達が、長い年月にわたって、神話の土をかし続けたことを尊いものと思ふ。県北の高千穂神社や、天岩戸神社の経営がそれであり、県南の高千穂は、霧島神宮の経営がそれである。私達が神話の里に敬意を感ずるのは、そうした里人の心に感応するからである。